「愛は恵みのうちに」　　ヨハネの手紙第一　３：１８－２４

序論

2024 年になりまして、第 3 の主日を迎えました。元旦の能登半島地震から 21 日、ちょうど 3 週間ということになります。少しずつ支援に向けた働きが始まりつつあり、私たちの属している日本同盟基督教団も、今、何ができるのかと模索しているところです。現地では、分断されていた道路に応急処置がされて、集落の孤立が解消されというニュースを聞く一方で、まだまだ避難生活を余儀なくされている方々が沢山おられます。そして、その困難な様子も、連日、報道されています。

そういう中で、先週は 1 月 17 日を迎えました。あの阪神淡路大震災から２９年です。各地で追悼式典が執り行われ、追悼の祈祷会をもった教会もありました。今年は、大きな地震が起こったばかりということもあり、阪神淡路大震災の記憶もひときわ鮮明に思い起こされ、心に迫りました。

当時、私は大学生で、この蛍池聖書教会に通っていました。下宿先のアパートは半壊しましたが、怪我もなく、幸いにも避難所生活を強いられることはありませんでした。ですから、今被災地におられる方々の辛さや悲しみ、悔しさは想像することしかできません・・・・が、しかし、想像すること、思いを寄せることが大切なんだ、ということを今回の準備をしながら思わされました。私たちキリスト者にとって、それは「祈り」というかたちをとるでしょう。そして、私たちの具体的な支援は、「祈り」から始まると深く思わされました。

祈り心

今朝のみことば、18 節でヨハネはこう言っています。「子どもたち。私たちは、ことばや口先だけではなく、行いと真実をもって愛しましょう。」この御言葉は、実際に行動すること、その行動によって愛を示すことの大切さを教えています。ですから、この御言葉を聞くと、私たちはついつい「何かしなければ」＝「何か具体的な行動を起こさなければ」とすぐに考えてしまいます。

しかし、その前に、今朝、少し立ち止まって、考えたいのは、「祈る」という事です。みなさんは、18 節のどの言葉が「祈り」と最も深いかかわりがあると思われるでしょうか。「ことばや口先だけ」でしょうか？・・・弱さと欠けを持つ私たちですから、そういう祈りをささげてしまうことがないとは言い切れないのが、ちょっと心苦しいところです(苦笑)。しかし「祈り」は決して「ことばだけのもの」や「口先だけのもの」ではありません。そんなものは本当の祈りではないということは、敢えて言わなくても、みんなが分かっていることです。

では「祈り」とは、「行い」なのでしょうか。「行いをもって愛する」という部分でしょうか？「祈る」ことも「行い」の一つであるという言い方もできるでしょう。しかし、やはり「祈り」が一番関係しているのは、「真実をもって」という部分でしょう。「祈り」こそ、真実でなければなりません。もし「祈り」に真実がないなら、何の意味もありません。祈らない方がましなくらいです。「真実をもって愛そう」とするとき、私たちは祈らずにはおれないはずです。また、愛の実践が、「祈り」を伴わないなら、それは独りよがりなものになりやすい危険を孕んでいます。

今日のみことばの箇所は、一言も「祈り」に触れていません。「祈り」という言葉は一つも出てきていません。しかし、祈りを思わせる言葉やフレーズをたくさん含んでいます。今朝の箇所を理解する一番のキーワードは、「祈り」です。「祈り」という言葉は、ここでは明確には使われてはいないですが、この箇所を記したヨハネは「祈り心」をもって執筆したのだということが文章から伝わってきます。

今朝の箇所は、実はいろいろなテーマを含んでいます。愛の実践の勧め、心の責めについて、確信をもつこと、互いに愛し合うという神の命令という具合に、いくつかのテーマに触れながら、話題が移っているかのように見えます。しかし、ヨハネの祈りの心に目を留めるとき、この御言葉から浮かび上がってく

るのは、ただシンプルに「祈り心」をもって神の御前に出ているヨハネの姿です。真実をもって人を愛していこうとするときに、ヨハネが神の御前に持っていた、この「祈り心」に心を留めることが、今朝のみことばを理解するうえで最も大切な視点だと思います。

ヨハネは、愛することの難しさをよく知っていたことでしょう。祈りのうちに苦闘しています。しかし、それを通して、主からの励ましを受け、神様の愛と真実に支えられて、ヨハネは人を愛することを学びました。愛することはときとして犠牲が伴うかもしれませんが、そこに喜びがあることを知りました。また、人を愛する難しさを思い知らされる度に、神の愛の深さを教えられ、神に愛されているという確信がいよいよ深められたことでしょう。こんな自分に神が無限の愛を注いでくださり、こんな私と共にいてくださることを、ヨハネは神の御前で見出し、神の御前で経験しました。それは、ヨハネの心に安らぎを与えてくれました。その恵みを彼はこの箇所を通して語っているのです。

「ことばや口先だけではなく、行いと真実をもって愛しましょう。」とヨハネが語ったとき、具体的にどのような行いを想定していたのかは、語られていません。しかしそれは、「祈り」に裏打ちされた「行い」であるはずです。

行いと真実を持って愛する

「ことばや口先だけではなく、行いと真実をもって愛する」。このことばは、真剣に考えれば考えるほど、真剣に受けとめれば受けとめるほど、自分の足りなさを覚えさせられます。知恵や思いの至らなさを自覚させられます。そして何よりも、「愛」の足りなさを思い知らされます。あらためて考えてみるならば、それがどれほど困難なことでしょうか。

ところが、ヨハネは続けて 19 節でこう言い切るのです。「そうすることによって、私たちは自分が真理に属していることを知り、神の御前に安らかでいられます。」

ヨハネは何故このように言い切ることができたのでしょうか。ヨハネはイエス様が選ばれた 12 弟子の一人ですし、特別、愛に満ち溢れた人だったのでしょうか。そんなことはないですよね。若いころに「雷の子」とあだ名されたヨハネは、激しやすくカッとし易い性格でした。あるとき、サマリヤ人がイエスさまを受け入れなかったことに腹を立てて、「主よ。私たちが天から火を下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」（ルカ９：５４）と言った人物です。彼のこのことばのどこに、愛があるでしょうか。とても真理に属している者から出てきた言葉であるとは思えません。ヨハネもまた、私たちと同じように、愛のなさや、自分自身の至らなさを、よく知る者でした。私たちと同じように愛することに困難を覚え、愛するよりも怒りや他の思いに煩わされてしまう者でした。

そんなヨハネが、「自分が真理に属していることを知り、神の御前に心安らかでいられる」というのは、なぜでしょうか？「自分が真理に属していることを知っている」というのは、自分にすぐれたところがあるから、それで真理に属していると考えたのでしょうか？ヨハネは、自分の力で、自分のもっている愛で、人を愛することができたのでしょうか？そうではありません。むしろ彼は愛することの困難を知り、葛藤を知っていました。

それなのに「自分が真理に属していることを知っている」とヨハネが言えたのは、愛のない者が愛する者に変えられているからです。つまり、そこに神さまが働いていてくださるから、神様に取り扱われて変えられているから、だから自分は真理に属していると、ヨハネは考えたのです。そして、同時に、神さまの御前に心安らかでいられました。

「自分が真理に属している」というのは、自分に何かすぐれたところがあるから、それで真理に属しているんだということではなくて、真理であるお方に取り扱われているということです。私たちは、神様を離れて「真実な行い」をすることはできません。神の助けなしに、私たちの力で、いくら愛そうとしても、

それは空回りするだけです。失敗するだけです。みことばが言うように、「ことばや口先だけではなく、行いと真実をもって愛する」ために、まず私たちがなさなければならないのは、「神とともに歩む」ということです。そして、それは、神様と向きあうという「祈り」の中から始まっていきます。

自分の心（心の責め）と神の平安

ヨハネは、次の２０、２１節で、「自分の心が責める」ということについて触れています。この部分から、ヨハネもまた祈りにおいて、もがき、葛藤したのだということが読み取れます。

20 節「**たとえ自分の心が責めたたとしても、安らかでいられます。神はわたしたちの心よりも大きな方であり、すべてをご存知だからです。**」普通は、心の責めを感じていたら、心が安らかではいられません。心に責めがある状態を「安らか」とは言わないのです。ここでヨハネは、「たとえ自分の心が責めたとしても」つまり、そういう状況が実際にあったとしても、「神の御前」には平安があると言っています。それは、私たちの心の状態とは関係がない、神が与える平安があるということです。普段、私たちは、自分の心で感じていることがすべてだと思っています。それが唯一の真実だと、無意識に受け入れていることはないでしょうか。

ヨハネは、「心の責め」を解消すれば安らかでいられるという言い方はしませんでした。「心の責め」を解消するために、「行いと真実をもって愛しなさい」とは言いませんでした。むしろ、行いと真実をもって愛そうとしていく時にも、心の責めはあると、ヨハネは言っているのではありませんか。たしかに私たちには責められるところがあります。あの時、あんな言い方をしなくても良かったんじゃないか？とか、一番困っているときに助けてあげられなかったとか、そういう経験は山ほどありますし、生きていれば、これからも増えていくことでしょう。誰も完全な人はいないのですから、心の責めを感じることがあるのは、ある意味人間にとって自然なことでもあります。

ですから、もし私たちが自分の心を見つめ自分が感じていることだけにとどまり続けるなら、いつまでたっても私たちの心に安らぎが訪れることはないでしょう。その責めから逃れようと、善い行いをしても何の役にも立ちません。それに、もしも心の責めから解放されようとして善い行いをするなら、それは真実な行いと言えるのでしょうか？その人の愛の実践は、真実をもってなされたと言えるのでしょうか？

また、心の責めから目をそらして、なかったものにしてしまうこともできません。一時的に忘れることができたとしても、それはまたすぐに別の形をとってやって来ます。そうなると私たちは自分を守るために身構えて、心のどこかに緊張を抱え込むか、開き直ってみて見ぬふりをすることになります。

しかし、それでも私たちには、神の御前で心安らかでいられる道が備えられていると、ヨハネは言います。ここで、私たちの信仰が問われることになります。主イエスは「すべて疲れた人重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ１１：２８）と言われました。神様は、私たちが、主は真実なお方であると信じ、神の祝福に与ることを望んでおられます。死の陰ではなく、いのちの光のうちを歩むことを望んでいてくださいます。律法ではなく、神の恵みのもとに生きることを望んでおられます。

自分心の責めを見つめたり、自分の行いに望みを置いている時には、私たちは、私たちを死に定める「律法のもとに」生きています。しかし、信仰によって、みことばの真実を受け入れ、神が良いお方であることを信じ、神の真実に期待するなら、私たちは心に神からの平安をいただくことができます。そのとき、私たちはもはや「律法のもと」ではなく、「恵みのもとに」生きています。

神の御前で

さて、愛のない私たちが「ことばや口先だけでなく、行いと真実をもって愛する」ためにはどうしたら

よいのでしょうか？愛がなく、欠けのある私たちが「真実」をもって人を愛していくためにはどうすればよいのでしょうか。そのためには、神の御前、すなわち「祈り」によって整えられていくことが大切です。

私たちの「真実」な行いは、神の御前において始まります。それは 2 つの意味で、神の御前において始まります。第一に、私たちは神の御前において、自分自身を偽る必要がないということです。

私たちは先ず自分自身を偽ることをやめなければなりません。人は誰しも、自分を守るために、心の外側に壁を作り、自分の本心が見られないようにしています。見られてしまってはマズいと知っているからです。ありのままの自分ではいられません。

私たちが唯一、ありのままの自分でいられる場所、それが「神の御前」です。主は、「わたしのもとで重荷をおろしなさい」と、今も私たちに語り掛けてくださっています。アダムは罪を犯したとき、「神の御前」に出ることを恐れました。それは神のさばきを恐れてでした。しかし、本当の安らぎがあるのは、まさにその「神の御前」だけなのです。アダムが恐れた、また人が本能的に恐れる「神のさばき」は、御子イエス・キリストの十字架により、解決があたえられました。神様は、私たちが罪ある者となり、神の御前に無価値な者となってしまったときにも、それを理由にして私たちを愛することをお止めにはなられませんでした。私たちへ変わらない愛を注ごうとされ、神に背を向けていた私たちにも、真実を尽くしてくださいました。キリストの十字架には、その神の愛と、神の真実が現わされています。

神の御前において、私たちは自分を隠すことはできません。神はすべてをご存知だからです。しかしそれ故にかえって、自分自身の心の中にあるすべてのものを、偽ることなく出すことができます。決して良い感情ばかりではないでしょう。自分でも受け入れられない汚い思いもあるでしょう。自分の心が責めるのを感じるかもしれません。しかし神の前に自分がどのようなものであるかを素直に認めるとき、自分の真実の姿を神に委ねることができます。背負ってきた重荷を下ろすことができます。

そして第二に、神の御前において、神は私たちに真実を示してくださるということです。それは私たちを、愛し続けるということにおいて示された真実です。神は私たちのありのままの姿をご存知です。そしてそれを知った上で、御子キリストを私たちに与えてくださいました。私たちの主は、私たちが、本当の姿を姿をさらけ出しても、なお私たちを受け入れてくださろう、なお愛そうとしてくださいました。この神の愛と真実に支えられて、はじめて、私たちは人を愛する者へとされていきます。神が私たちを受け入れてくださったので、私たちも人を愛し受け入れることができるのです。

そしてイエス様も私たちに真実の愛とは何かを教えてくださいました。ことばや口先だけではなく行いと真実をもって愛する、その愛をまず私たちに示してくださったのは、私たちの主イエス・キリストです。また、聖霊によって、私たちはこの神の愛の大きさに目が開かれていきます。「**この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているのです。**」（ローマ５：５）私たちと共にいてくださる聖霊の働きによって、私たちは愛せない、愛に悩む者から、人を愛する者へと変えられ、整えられていきます。

もはや、私たちは、愛せない自分を神の前に偽る必要はありません。私たちはただ神の御前でのみ、「真実」でいられます。そして、神とキリストと聖霊の真実に支えられ、はげまされて、愛のない者、愛することに困難を覚えていた者が、真実をもって愛する者へと変えられ、犠牲を惜しまずに愛を示す者へと整えられるのです。これらが「神の御前」で、すなわち、祈りのうちに起ってくることです。

私たちは祈りのうちに格闘する中で、自分の真実と、神の真実との間を行ったり来たりします。しかし、もし私たちが神の御前で自分の真実の姿を明らかにし、明け渡すことを恐れないなら、神はご自身の真実のうちに私たちを引き上げ、確信を与えてくださいます。

そして、神が本当に自分を愛し受け入れてくださっていることを知り、神の愛と真実を体験すること、その恵みの体験が、私たちが真実の愛の源です。私たちの力や資質ではなく、神の真実な愛こそが、私たちが立つところです。

何でもいただける祝福

さて、これまでのところで、私たちは「神の御前」すなわち、祈りにおいて、神さまが私たちを整え、人を愛する者に変えてくださるということを学んで来ました。その過程で、心の責めを覚えつつも、神の御前で私たちが取り扱われていくことを見てきました。それは、祈りにおいて、私たちが神様の御心に触れ、私たちの思いではなく、神の御心に従う者とされていくということでもあります。

私たちの思いが、祈りの中で練られて、神の思いと一致していくとき、祈りが聞かれてゆきます。御心に適った祈りが聞かれていくのは、必然だからです。

それゆえ、ヨハネはこう言います。22 節「そして、求めるものを何でも神からいただくことができます。私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。」これは、今まで見てきたように、愛のない私たちが、しかし祈り心をもって神様に励まされながら、神とともに人を愛そうとしていく中で聞かれてゆく祈りです。行いと真実をもって愛することに取り組んでいくときに、神の御前に私たちが取り扱われていくから聞かれる祈りです。

22 節を文脈から切り離すことはできません。神の命令を守り、神に喜ばれることを行うなら、私たちが求めるものを与える義務が神にあるかのように考えることは間違いです。神様を自分が求めるものを手に入れるための「手段」としてはいけません。それは、生ける真の神様を貶めてしまう恐ろしい罪です。

愛は恵みのうちに

今朝のみことばの後半部分で語られているのは、ヨハネが、神の御前で祈りのうちに教えられ、確信してきたことです。行いと真実をもって愛することに取り組んできたヨハネは、互いに愛し合うことが、神の命令であり、神に喜ばれることであると知りました。そのとき「求めるものを何でも神からいただくことができる」という信じられない素晴らしい恵みをヨハネは確信することができました。

人を愛することに祈りの中で葛藤してきましたが、それは 24 節にあるように「神の命令を守ろうと神のうちにとどまること」でした。そして同じく 24 節によれば、そのとき「神もまたその人のうちにとどまってくださる」という恵みについてヨハネは知りました。そして、神が私たちにそれらのことを押してくださる為に、聖霊を与えてくださったとも言っています。これらが、神の御前に、真実を尽くす者に与えられる恵みです。

私たちの内側には、真実な愛はありません。しかしこのように祈りのうちに神の御前に整えられていくとき、神様の愛と真実に支えられ、励まされて、御霊の働きにより、人を愛することができる者へと変えてくださいます。神の御前にとどまり続けることが、私たちの真実な愛の実践のはじまりです。神の愛と恵みの中にとどまり続けるとき、私たちは与えられた御霊により愛することの困難を超えて、そこにある喜びに目が開かれてゆくのです。

神の御前にて、素直になり、心を尽くして祈りましょう。祈りつつ、「言葉や口先だけではなく、行いと真実をもって愛する」ことに励んで参りましょう。そのように、御前に祈りをもって整えられた私たちの愛は、神さまがＩコリントのみことばのような愛へと引き上げ、用いてくださいます。

「4愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。5礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、6不正を喜ばずに、真理を喜びます。7すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます。8愛は決して絶えることがありません。」　（Ｉコリント１３：４－８）

お祈りしましょう。